新選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年10月10日　印刷
昭和55年10月20日　発行
（第20刷）

森　鷗外著

雁

籾山書店版

刊　行　財団法人　日本近代文学館
東京都目黒区駒場4－3－55
代表者　小田切進

編　集　名著複刻全集編集委員会
代表者　稲垣達郎

総発売元　株式会社　ほるぷ
東京都新宿区新宿2－19－13
代表者　中森蒔人

製　作　株式会社　ほるぷ出版

東京連合印刷株式会社

このページ（表・裏）は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

雁

森

林太郎著

壹

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出來事だと云ふことを記憶してゐる。どうして年をはつきり覺えてゐるかと云ふと、其頃僕は東京大學の鐵門の眞向ひにあつた、上條と云ふ下宿屋に、此話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になつて住んでゐたからである。その上條が明治十四年に自火で燒けた時、僕も燒け出された一人であつた。その火事のあつた前年の出來事だと云ふことを、僕は覺え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

てゐるからである。

上條に下宿してゐるものは大抵醫科大學の學生ばかりで、其外は大學の附屬病院に通ふ患者なんぞであつた。大抵どの下宿屋にも特別に幅を利かせてゐる客があるもので、さう云ふ客は第一金廻りが好く、小氣が利いてゐて、お上さんが箱火鉢を控へて据わつてゐる前の廊下を通るときは、きつと聲を掛ける。時々は其箱火鉢の向側にしやがんで、世間話の一つもする。部屋で酒盛をして、わざ〳〵肴を拵へさせたり何かして、お上さんに面倒を見させ、我儘をするやうでゐて、實は帳場に得の附くやうにする。先づざつとかう云ふ性の男が尊敬を受け、それに乘じて威福を擅にすると云ふのが常

である。然るに上條で幅を利かせてゐる、僕の壁隣の男は頗る趣を殊にしてゐた。

此男は岡田と云ふ學生で、僕より一學年若いのだから、兎に角もう卒業に手が屆いてゐた。岡田がどんな男だと云ふことを説明するには、その手近な、際立つた性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云ふことである。色の蒼い、ひよろ〳〵した美男ではない。血色が好くて、體格ががつしりしてゐた。僕はあんな顔の男を見たことが殆ど無い。強ひて求めれば、大分あの頃から後になつて、僕は青年時代の川上眉山と心安くなつた。あのとう〳〵窮境に陷つて悲慘の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が

一寸岡田に似てゐた。尤も當時競漕の選手になつてゐた岡田は、體格では遙かに川上なんぞに優つてゐたのである。

容貌は其持主を何人にも推薦する。併しそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出來ない。そこで性行はどうかと云ふと、僕は當時岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少からうと思つてゐた。學期毎に試驗の點數を爭つて、特待生を狙ふ勉强家ではない。遣る丈の事をちやんと遣つて、級の中位より下には下らずに進んで來た。遊ぶ時間は極つて遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく歸る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、さうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでゐるとか、暑中

休暇に故郷に歸るとかの外は、壁隣の部屋に主人のゐる時刻と、留守になつてゐる時刻とが狂はない。誰でも時計を號砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問ひに行く。上條の帳場の時計も折々岡田の懷中時計に據つて匡されるのである。周圍の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればゐる程、あれは信頼すべき男だと云ふ感じが強くなる。上條のお上さんがお世辭を言はない、破格な金遣ひをしない岡田を褒め始めたのは、此信頼に本づいてゐる。それには月々の勘定をきちんとすると云ふ事實が與かつて力あるのは、ことわるまでもない。

「岡田さんを御覽なさい」と云ふ詞が、屢々お上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のやうなわけには行かないさ」と先を越して云ふ學生がある。此の如くにして岡田はいつとなく上條の標準的下宿人になつたのである。

岡田の日々の散歩は大抵道筋が極まつてゐた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお歯黒のやうな水の流れ込む不忍の池の北側を廻つて、上野の山をぶらつく。それから松源や雁鍋のある廣小路、狹い賑やかな仲町を通つて、湯島天神の社内に這入つて、陰氣な臭橘寺の角を曲がつて歸る。併し仲町を右へ折れて、無縁坂から歸ることもある。これが一つの道筋である。或る時は大學の中を拔けて赤門に出る。鐵門は早く鎖されるので、患者の出入する長屋門から這入

つて拔けるのである。後に其頃の長屋門が取り拂はれたので、今春木町から衝き當る處にある、あの新しい黑い門が出來たのである。赤門を出てから本郷通りを歩いて、粟餅の曲擣をしてゐる店の前を通つて、神田明神の境内に這入る。そのころまで目新しかつた目金橋へ降りて、柳原の片側町を少し歩く。それからお成道へ戻つて、狹い西側の横町のどれかを穿つて、矢張臭橘寺の前に出る。これが一つの道筋である。これより外の道筋はめつたに歩かない。

此散歩の途中で、岡田が何をするかと云ふと、ちよい〳〵古本屋の店を覗いて歩く位のものであつた。上野廣小路と仲町との古本屋は、その頃のが今も二三軒殘つてゐる。お成道にも當時その儘の店

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

がある。柳原のは全く廢絶してしまつた。本郷通のは殆ど皆場所も持主も代つてゐる。岡田が赤門から出て右へ曲ることのめつたにないのは、一體森川町は町幅も狹く、窮屈な處であつたからでもあるが、當時古本屋が西側に一軒しかなかつたのも一つの理由であつた。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云へば、文學趣味があるからであつた。併しまだ新しい小說や脚本は出てゐぬし、抒情詩では子規の俳句や、鐵幹の歌の生れぬ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雜誌を讀んで、槐南、夢香なんぞの香奩體の詩を最も氣の利いた物だと思ふ位の事であつた。僕も花月新誌の愛讀者であつたから、記憶してゐる。西洋小說

の翻譯と云ふものは、あの雜誌が始て出したのである。なんでも西洋の或る大學の學生が、歸省する途中で殺される話で、それを談話體に譯した人は神田孝平さんであつたと思ふ。それが僕の西洋小說と云ふものを讀んだ始であつたやうだ。さう云ふ時代だから、岡田の文學趣味も漢學者が新しい世間の出來事を詩文に書いたのを、面白がつて讀む位に過ぎなかつたのである。

僕は人附合ひの餘り好くない性であつたから、學校の構內で好く逢ふ人にでも、用事がなくては話をしない。同じ下宿屋にゐる學生なんぞには、帽を脫いで禮をするやうなことも少かつた。それが岡田と少し心安くなつたのは、古本屋が媒をしたのである。僕の散

歩に歩く道筋は、岡田のやうに極まつてはゐなかつたが、脚が達者で縦横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足を止めて見る。さう云ふ時に、度々岡田と店先で落ち合ふ。「好く古本屋で出くはすぢやないか」と云ふやうな事を、どつちからか言ひ出したのが、親しげに物を言つた始である。

其頃神田明神前の坂を降りた曲角に、鈎なりに縁臺を出して、古本を曝してゐる店があつた。そこで或る時僕が唐本の金瓶梅を見附けて亭主に値を問ふと、七圓だと云つた。五圓に負けてくれと云ふと、「先刻岡田さんが六圓なら買ふと仰やいましたが、おことわり申したのです」と云ふ。偶然僕は工面が好かつたので言値で買つた。

二三日立つてから、岡田に逢ふと、向うからかう云ひ出した。

「君はひどい人だね。僕が切角見附けて置いた金瓶梅を買つてしまつたぢやないか。」

「さう〳〵君が値を附けて折り合はなかつたと、本屋が云つてゐたよ。君欲しいのなら譲つて上げよう。」

「なに。隣だから君の讀んだ跡を貸して貰へば好いさ。」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今迄長い間壁隣に住まひながら、交際せずにゐた岡田と僕とは、往つたり來たりするやうになつたのである。

貳

その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であつたが、まだ今のやうな巍々たる土塀で圍つてはなかつた。きたない石垣が築いてあつて、苔蒸した石と石との間から、齒朶や杉菜が覗いてゐた。あの石垣の上あたりは平地だか、それとも小山のやうにでもなつてゐるか、岩崎の邸の中に這入つて見たことのない僕は、今でも知らないが、兎に角當時は石垣の上の所に、雜木が生えたい程生えて、育ちたい程

育つてゐるのが、往來から根まで見えてゐて、その根に茂つてゐる草もめつたに苅られることがなかつた。

坂の北側はけちな家が軒を並べてゐて、一番體裁の好いのが、板塀を繞らした、小さいしもた屋、その外は手職をする男なんぞの住ひであつた。店は荒物屋に烟草屋位しかなかつた。中に往來の人の目に附くのは、裁縫を敎へてゐる女の家で、晝間は格子窓の內に大勢の娘が集まつて爲事をしてゐた。時候が好くて、窓を明けてゐるときは、我々學生が通ると、いつもべちやくちや盛んにしやべつてゐる娘共が、皆顏を擧げて往來の方を見る。そして又話をし續けたり、笑つたりする。その隣に一軒格子戶を綺麗に拭き入れて、上が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.